

## 「わが子の『脳死』と向き合う家族」を見て

脳死を「血流のある暖かい体に触れつつ身近な人の『死』と思えるであろうか」と、当 HP 記事「『臓器移植法の改正案』の報道に接して（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（I）、2004.2.26.：参照）」の中で書いたことがあるが、未だ「脳死は人の死」と受け入れるだけの自信はない。

先日、TV 局のクルーがこども病院・小児集中治療センターの取材過程で、偶然に出会ったある夫婦の「娘（5歳）が必死で闘う姿を記録して欲しい」との希望で撮影・記録を許されたが、その後予期せぬ脳死を宣告され心臓死に至るまでの家族と医師たちのドキュメント番組「さよならを言う前に～わが子の『脳死』と向き合う家族～」を見た。

少女は、肺炎で突然心肺停止（10分程）なり、手当で蘇生したが直ぐにかかりつけの医院から小児集中治療センターに転院するも数日が山場といわれる危篤状態が続いたが、10日後に回復の兆し。

でも、少女は脳死が疑われ、「医師たちは脳死を巡る“生と死の線引き”にどう向き合ったか、家族は脳死を受け入れることができるのか、その間の家族と医師の間のやりとり、家族の心の揺れを撮影・記録」されたドキュメント番組であった。

少女には、まだ年少の兄（10歳）と姉（8歳）がおり、医師が妹の脳死状態を兄姉に説明するシーン、心臓停止（死）まで家族が家族として共に過ごす時間の確保のために病院が配慮した個室で、学校行事のビデオを見せり絵本を読み聞かせる兄のシーン、手を握りながら話しかける姉のシーン、等々の家族の様子も撮されていた。

娘の死に向き合う時間を家族として持てたことを母親は医師たちに感謝しつつも「（脳死は人の死であることは）頭（理屈）で分かっても、心（感情）がついて行かない」と面会の折に涙ながらに呟いていたが、遺される家族の正直な感情でないだろうか。

小児は脳死後数日から数ヶ月で心臓停止（死）に至ると言われているが、少女は入院2ヶ月で旅立った。

家族にすれば娘の回復への記録として取材に応じたのに予期せぬ脳死の娘を看取る過程の記録となったが、「脳死とは何か、家族と医師は何を選択、判断しなければならないのか、誰もが向き合う可能性のある問題」であるだけに、貴重なドキュメント記録になったと思う。

一方、脳死宣告で臓器移植では、家族は「死」を受け止める時間的余裕がないだけに大変だろうなあと思う。